

☆ 目 次 ☆

うごき

★奨学制度の今後の問題.....佐藤三樹太郎... 2

藝術と自然と人間.....摩 壽 意 善 郎... 5

新制大学における正科体育について.....平 野 出 見...14

中学校の累加記録摘要について.....北 岡 健 二...20

海外の教育・アメリカの公立学校.....藤 本 勝...26

一つの窓.....石 森 延 男...24

書 評.....38

純潔教育について.....35

★文部日誌.....34

★学校植林運動の実施について.....39

★重要通達事項一覧表・法令告示事項.....48・42



1949年

と構図を策定しようとしているとき、生産單位としての人間の量と質を決定する教育の生産性を取上げないということは、いかに重要なことである。このことはきわめて重要なことで、いかになる困難があつても、われわれはこの分野における研究を急がなければならぬ。今日奨学制度の確立が火急の要請下にあるとき、今さら教育費の根本的性格を再検討しなければならぬといふことは、いかにも残念なことではあるが、永年にわたって教育費がそのときそのときの御都合主義に左右されてきた過去を想うならば、「おそかりし」といふことも、このさいこそ断乎としてこのことが明確にされなければならぬ。

この結果將來にたいする教育の規模や計画が万が一現在のそれより縮小されることにならうとも、それがわれわれの國がおかれる地位と國力からくるものであつて、理論的、科学的に測定されたものであり、しかもそれが完全にわれわれの社會によつて保障されるものであるならば、これに従いたい。

このようにして國の教育費が明確にされるならば、次には教育費そのものの中において奨学資金として充當されるべき額を定めることである。もとより奨学ということは學校あ

てのことであるから、大ざっぱにいつても義務教育に要する一切の経費、高等教育機關の整備充実に要する経費、さらには學術科學の振興、私學の振興に要する経費等は少くとも奨学以前の問題として優先することになるのは当然であるから、この面からも奨学資金の財源は限定されてくることになる。

以上によつて年々計上する國費による奨学資金が究明されるならば、これをもつてどれだけの学生を救うことができるか測定することになるが、おそらくはこれのみで最初にかけた第一の問題すなわち教育の機会均等を確保する最少限度の学生数を救うことができるとは考えられない。

こゝで第二の問題として國費以外の財源の方途を講ずる必要がある。このことはたとえば目下企画されている教育復興金庫案のごとく根本的で、かつ永続的な方策であるべきであつて、一時的な寄附募集のごときものであつてはならない。この金庫が世論の支持をえて設立され、毎年一定の金額を日本育英會に奨学資金として融資されるならば、こゝにはじめてわれわれの社會における全体としての奨学制度が保障されることになる。

これを要するに奨学制度の問題はそれが依存できる國費の限度を明確にすることにも、これと一体となるべき他の財源確立の措置を急ぐことである。(奨学教育局長藤原三樹太郎)

アメリカの対外奨学金制度

アメリカに對外奨学金が設けられるようになったのはイギリスに留学するアメリカの学生に奨学金を提供したセシル・ローズ資金の影響に負うところが多い。現在、ロクソフエラー財團、カーネギー財團、國際教育協會を初め幾多の團體が、米國に留学する外國の学生と海外に留学する米國の学生のために奨学金を提供しているが、戰後アメリカ政府がフルブライト法の下に設けた留学交換計画は新しい大規模な奨学金制度として最も注目するに足る。同法は、各國にある米國の戰時余剩物資を各國政府が民間に賣却することを許す代りにその賣上金はすべて、國外に留学する米國人や米國に留学する外國人の学費、旅費ないし生活費の支出に充てるべきことを規定した法律である。この計画に参加する諸國は英、佛を始め二十二ヶ國に及び、今後二十一年間にわたる時價約一億四千万ドルの余剩物資がかかる使途に充てられる予定である。

藝術と人間と自然

— 藝術教育の資料として —



本稿は第二回社会教育研究大会に際し筆者が福井縣と長野縣において、藝術教育の問題に關して行つた講演の内容に、諸家の説を取り入れ潤色補筆を施したものである。

わが國が過去においてすぐれた藝術文化をもち、それを今日まで傳承して來たことは、われわれの常に誇りとしていたところである。しかし、それならば過去の日本が果して欧米諸國に比べて見劣りしない文化的な國であつたか、ということについては、今日十分に反省をしてみる必要がある。

わが國の傳統的なすぐれた藝術文化は、確かに世界にも誇り得るものであつた。しかしそうしたすぐれた藝術文化は、

中には庶民の藝術として發達して來たものもあつたが、どちらかといえば、一部の限られた階層の人々の独占物として存在していたとも言えるのであつて大衆の生活とはかなり縁遠い存在のものが多かつたことは否定できない。

床の間に書画を飾り、庭園に自然の風致を凝らすわれわれの傳統的習慣は、今日もなお一般化しており、美に對するわれわれの繊細な心づかいを示すものではあるが、それも多くの場合は、ただ単に形式的な、因襲的なしきたりに因るもので、必ずしも藝術と生活との溶け合つた姿ではなかつた。むしろそれは、いわゆる「床の間」式の飾物で、生活の中に完全に肉体化されたものではなかつたといふ得よう。

かつて美術史研究のためイタリヤの町々を歩き回つたこと

摩壽意善郎

があつたが、そのとき深く印象づけられたことの一つは、偉

大な文学者や藝術家の名前をつけた町や通りや廣場が至るところにあることであつた。たとえば有名な「神曲」の詩人ダンテにゆかりのある場所にはダンテ廣場、「デカメロン」の作者ボッカッチオに因縁のある処にはボッカッチオ通り、「つばき姫」、「アイーダ」等の歌劇の作者として有名なヴェルディに由緒ある通りにはヴェルディ通り、その他ミケランジェロ廣場、レオナルド・ダ・ヴィンチ廣場、ドナテロ廣場等々と実に枚挙にいとまないほどである。そうしてそれらの場所には、その偉大な藝術家の銅像や石像が立ち、市民は子供の時から、日夜それら偉大な藝術家の面影に接し、その業績について深く思い知らされているのである。また町々には昔の大建築家の建てた家がそのまま残つて、今日もなお日常生活に使用し、町角やアーケードや、廣場や噴水には、偉大な彫刻家の作った彫像が飾られ、寺々には又、有名な画家の手になる壁画や祭壇画が残り、朝な夕な禮拜のたびに市民の目に触れている。人口二、三万の小都市にも歴史博物館や美術館があり、その地方に関係のあつた作家の遺作その他の文化財を集めて、その町の呼物の一つとなつてゐる。そこではもう、藝術文化がすっかり市民の生活に溶け込んでゐるやう

な。翻つてわが國においてはどうか。軍人や政治家の銅像はあつても、藝術家の銅像などほとんど街頭に見たこともなく、藝術家の名前を冠した町や通りなどほとんど聞いたこともない。これは藝術が國民一般からあまり尊敬されていなかった何よりの証拠ではなからうか。過去の日本の名士と言われる指導者たちの中には、みづから音楽や美術や文学を解さぬことをもつて得意とした人もあり、はなはだしきは藝術は文弱なりとして排斥する考え方すら一部に通用していた。つまり武弁をもつて美德とした一種の封建的な考え方が支配的な力を持つていたともいえる。こんな状態にあつたわが國では、いかにすぐれた文化的遺産がわれわれに傳えられ、少数の目ざめた文化人が世を憂えていても、とうていヨーロッパの國々と文化的に肩をならべて行くことなど思ひもよらぬことであつた。國民一般が眞に藝術を愛好し、理解し、そして藝術を尊重する時に、初めてその國は「文化國家」の名に値するのであつて、敗戦後のわが國に唱えられ出した「文化國家建設」の合いことは、文化に対するわが國人の関心の低さを思うとき、何か空虚な感じを押えることができなく。

藝術文化と生活との融合という点で、このように日本がヨーロッパの國々より立ち遅れてゐたわけは何かというと、それは何よりもまず、日本がルネッサンスを経験してゐないことであると思われる。ルネッサンスは普通「文藝復興」と訳されるが、それは元來「再生」の意味で、ヨーロッパにおける中世から近世への推移において現われた画期的な人間精神の革新を意味してゐる。

西洋の歴史を振りかへてみると、古代ギリシアにおいて栄えた文化はローマ帝國に繼承され、はなやかな古代文化が展開されたが、ゲルマン民族の集團的移動によって西ローマ帝國は滅亡し、このゲルマン民族の登場によって西洋の歴史は「中世」と呼ばれる時代にはいつた。ところがかれらの侵入は土地を荒廢させ西洋文明を再び野蠻時代に逆轉させたばかりか、かれらは封建諸侯として各地に割拠して、いわゆる「中世の封建制度」をうち樹てたのである。そうして絶えない戦争と征服とが軍事指揮者の勢力を増大させ、一方において平民や農奴はますます疲弊して行つた。そこでは人間精神の自由な発達は見られず、獨創的な藝術や学問はほとんど生れる余地がなかつた。こうした時代にヨーロッパ人が唯一の精神的な寄り所としたのはキリスト教であつて、キリスト教は元

來悩める者の宗教であり貧しき者の味方であつたが、しかしその教義は現世の富や権力のむなしさを説くものであつて、決して富者や権力者への反抗を説くものではなかつたので、封建的支配者はこの教えをその支配体制の維持のために利用し、一方キリスト教会はそれとともに墮落して行つた。

このようにして中世は數世紀の長きにわたつて、権力的な豪族諸侯の封建制度と、すべてを神に奉仕させるキリスト教の禁欲的な教權主義とによって、人間の精神の自由を抑圧し、いわゆる「暗黒時代」を現出してゐたが、この暗い中世を打破して近代世界を展開する花々しい役割を演じたのが、ルネッサンス運動にほかならなかつた。この運動の背景には十字軍の遠征による東西文化の交流、統制的なギルド制度の崩壊による商工業の發達や都市の發達などが遠因として考えられるが、そのおもな原動力となつたものは、いうまでもなく、各個人の「人間性の自覚」であつた。中世の宗教的束縛と封建的抑圧の中から、人々は次第に人間性に目ざめ、人間の力の自由な發揮と人間生活の豊かな充足と人間の解放を求め始めたのである。

この「人間性の自覚」の一端を如実に示す卑近な例として、中世のキリスト教会における「聖母崇拜」の思想の發展を挙

けることができよう。そもそも聖母崇拜は、中世のキリスト教主義の禁欲的傾向に対する人間の本性の必然的な償いとして、発展して来たとも言えるのであって、いかに当時の僧侶が独身生活を守って俗塵を遠ざけていたとはいえ、その肉体から、自然の人間を駆逐することはできなかった。このようにして聖母という資格で女性が僧院にはいり込み、女性の優しさをもって飢えた心を和らげることになったのである。結局は人間は感情の動物であり、かれらは必ずしも常に教義を欲していたのではなく、時には優しい女性の同情を望むこともあったであろう。しかし聖母崇拜は処女の崇拜であり、成熟した女性の崇拜であったが、それは肉欲を越えたものであった。それは又、母性の崇拜でもあったが、清淨受胎の母性であった。したがって聖母の性格には純潔性と肉感性との不思議な混合があったともいえる。こうした人間的な同時にまた宗教的な欲求に應ずるため、聖母マリアが中世末期からルネッサンスにかけて続々と絵画に描かれ、教会に、僧院にとはいって行つたのである。そうして最初は神の子キリストの母として神祕的な姿に描かれていたマドンナが、次第に人間的な解釈を加えられるに至り、ある時は生き生きとした現実の一女性として描かれ、ある時は内奥に官能を秘めた憂を含

む甘美な女性として描かれ、又ある時は若く美しい慈愛に満ちた母親として描かれたのである。中世末期の人々がますますからの解放のために取り上げたものは、久しくずもれてきた古代ローマの文化であった。そしてこの古代ローマ文化へのあこがれは、さらにその源流の古代ギリシアの文化へとさかのぼって行つた。中世の中に芽生えてやがて飛躍的な発展を遂げるに至つたルネッサンス運動は、まず古代の学問藝術の復活という形をとって現われた。ルネッサンスが「文藝復興」と訳されるわけである。しかしこうした古代の復興は、ルネッサンスにおいては、あくまでもかれらの生活意欲の表現であつた。かれらはそれを通じてまず個人の意識に目ざめた。そうして自分の目で物を見、自分の頭で物を考えることを知つた。周囲の自然や人間の中に、これまでの人の氣づかなかつた新しい美を発見し、それをみずからの力で表現しようとするようになった。

そこに國民文学の興る端緒を開くと共に、古代から中世にわたる思想の総括を試みて異教とキリスト教とを結びつけ、中世から近世への橋渡しをなし遂げた。これに次ぐベトラルカはその「敘情詩」に永遠の戀人ラウラをうたい、ポツカッチオもまた「人曲」とも評されるデカメロンを著わして、共にこの運動の先駆者として、人間性の自覚とギリシア古典の研究とを促し、千四百年代におけるヒューマニズム全盛の風潮を將來せしめたのである。

美術においてもまた、既にダンテにやゝ先立つてチマブエがフィレンツェに現われ、当時の神祕的な中世的ビザンティウム様式から、自然への新しい発足を開始し、その弟子といわれ、またダンテとも交遊があつたと伝えられるジョットオにおいて、さらに自然への飛躍的な接近が進められ、中世から近世への、絵画における新しい橋渡しが完成されたのである。そしてジョットオ以後の美術家たちも、自然を見つめることを学んで、それぞれ自然界の新しい面を発見しつつ、千四百年代初頭にはついに、近代絵画の始祖といわれるマサッチオの驚くべきリアリズムを生んだのである。

そのようにして千四百年代の訪れとともに、美術における本來のルネッサンスがイタリアにおいてははなやかな姿で展開

されることになり、ギベルティ、ブルネレスキ、ドナテロロとあい次いで現われた彫刻家は、それぞれ古代彫刻に範をとりつつ、ついにルネッサンスの古典的彫刻を大成した。また絵画の領域においても、マサッチオはその写實的描写の上に、この時代としては全く驚異に値する明暗の対比と色調の感覺を導入しており、ドメニコ・ヴェネツィアーノは、自然描写の中に巧みに自然の外光を捕えて、そこに空氣遠近法を取り入れている。又かの敬けんな信仰を幾多の宗教画に描き表わした画僧フラ・アンジェリコでさへ、リアルな草花や樹木を描いて、自然に対する新鮮な感覺を見せており、フィリッポ・リッピもまた、自然を見つめ、豊かな線で自然のきわめて微細な細部まで描出し、とくにかれの描く聖母は、生き生きとした血の氣の通っている現実の一女性として描かれていた。ボライウオーロやヴェルロッキオは人体の描写に解剖学的な正確さを求めて写實主義に徹し、当時のリアリズムの主流におけるチャンピオンとなつていった。

ポツティチェルリも、千四百年代後半のフィレンツェに生まれて写實主義の洗礼を受けると共に、その時代の風潮であつた古代復興の精神にも影響され、「ヴィナスの誕生」や「リマヴェーラ」のような異教的主題の絵画を描いている。も

つともかれの本質的な氣稟はまだ多分に中世的な宗教的精神によって支配されていたため、宗教的であると同時に官能的であったかれの幻想においては、ヴィナスはそれらの反対な二つの要素が二重に入り混ざっている影像として現われ、ヴィナスを描いてはマドンナが宿り、マドンナを描いてはヴィナスが宿るといふ不思議な美の世界を創造した。

このように、遠く中世そのものの中にほう芽をもち、そしてその中世から離脱しようとしたこのルネッサンスの革新運動は、千三百年代の初頭以來、常に新しく自然と人間とを発見しつつ、そこに「人間の再生」と「古代の復興」という二つの契機をはらんで、千四百年代には、さながら春の野に百花の一時に咲き出たように、フィレンツェを中心にルネッサンス本来の姿を展開し、さらに千五百年代にはいつては、かのレオナルド・ダ・ヴィンチを初め、ミケランジェロやラッファエロやアンドレア・デル・サルトなどによって理想主義的な古典的美術が完成され、ルネッサンスの最盛期が現出されたのである。このようにルネッサンス絵画の主流は、フィレンツェを舞台として、ジョットオに始まりマサッチオに中興されミケランジェロによって大成されたが、その後には絵画の主流はヴェネツィアに移り、ジョルジョーネを初め、

ティツィアーノやティントレット等の巨匠を輩出した。このヴェネツィア派絵画は、様式史的には、フィレンツェ派絵画が幾何学的な合理主義的な形態主義を重視していたのに対し、官能的な色彩主義を採り、その世態画的な傾向の中に人間性の本然の姿を捕えることに成功したのである。

私は、イタリア文藝復興期の美術の発展の上に、ルネッサンスの様相の例示を試みたが、ルネッサンス運動はひとり美術の領域にのみ現われたものではなく、それは当時のあらゆる文化的現象の上に現われた人間精神の改革であった。つまりそれは、中世の封建制度の抑圧や没個性的な教会主義の束縛から離脱して、人間のもつ本性を自由に發揮し完成せしめようという運動であって、人間的自覚の結果に外ならなかった。そうして古代人の人間性尊重の風を学んで、完美な人格に到達しようとしたのである。超世間的な神の權威に代るに人間の權威をもつてのが、ルネッサンスの眞髓であった。ルネッサンスはこのように人間を中心として展開されたが、しかし神中心の中世に全く反対の立場に立つものはなかった。ルネッサンス人の魂の内奥には本質的にはキリスト教が残されていたのであって、それ故にこそ、ルネッサンスを通じて、かの宗教改革も達成され得たのである。そこ

に、ルネッサンスの一概に規定し得ない複雑な精神史の様相もあるわけであるが、しかし一般的には、ルネッサンスの本質的な意義は、神中心の中世の中から人間性の自覚にめざめ、古代ギリシアの異教主義を指向して、そこにヘレニズムを再興した点にあると言って差しつかえあるまい。

かくてイタリアを中心として開花したルネッサンスは、アルプスを越えてドイツ、フランス、イギリス、オランダ、スペイン等において豊かな果実を結び、近代欧州文化の発展の端緒となったのである。西洋文明の本質的な二大要素は、キリスト教の本源的な形態としてのヘブライズムと、それに對立するヘレニズムであると言われるが、この二大要素の對立と統一との近代的発展の端緒を開いたのがルネッサンスであつて、このルネッサンスを経験している所に西洋文化の今日の普遍的な繁榮の根柢があるといえよう。翻つてわが國は、かつてこのようなルネッサンスを経験したことがあるであらうか。人あるいは、同時代的な文化の繁榮の時期を指摘して、桃山時代を日本のルネッサンスと言うかも知れない。しかし西洋のルネッサンスの本質的な意義とその様相を思い巡らせば、桃山文化が西洋のルネッサンスと似ても似つかぬものであることは直ちに判明するであらう。

日本の今日の悲劇は、むしろ、今までにこのルネッサンスを経験していなかった所にあるとも言えよう。確かにわれわれは服従することにのみ慣れて、個性の尊嚴を自覚していなかった。十七世紀のフランスの数学者であり哲学者であったバスカルの有名なことばに「人間はか弱い一本の葦にすぎない。宇宙によって一たまりもなくおしつぶされるかも知れないが、しかし人間は考える葦である。考えることによつて宇宙をさえ包含する」という一節があるが、なんと味わい深いことばではなかるうか。ヨーロッパ人は既にみずからの力によつてルネッサンスを獲得し、人間の自覚に目ざめていたの對し、われわれは悲しいことに、このたび初めて、外的な力、すなわち敗戦という事實によつて、かろうじて人間性の自覚に到達し、自由に考えること、人間性を尊重すべきことを知らされた。もちろん個々の自覚していた人々の存在を否定するものではない。しかし一般的な問題としては、確かにわれわれは今まであまりにも個性の尊嚴を知らな過ぎたと言つても誤りではなかるう。そうしてそこに日本の近代文化の立ち遅れがあつたとも言えよう。

今日われわれの間に藝術文化への強い欲求が見られ、花々しい藝術復興の夜明けが見えたような錯覚を起しがちである

が、これは敗戦の結果、他力的に現われた反動的現象とも言えるのであって、ヨーロッパにおけるルネッサンスのような内面的な自覚によってもたらされたものではない。したがって今日の藝術文化復興の様子を見て、直ちに喜んではいけな
い。この藝術復興の氣運に、「正しい人間性の自覚」という本質的な筋金を入れることが、われわれ教育面に携わる者の重要な任務である。そうしてわれわれの生の独自の解決の機關として、またわれわれの自覚的な人間性の欲求として、藝術が生れ、藝術を愛し、藝術を尊重する氣運を醸成することが必要で、かくて生活の中に次第に藝術が溶け込み、美的情操がとうややされて、生活の美化も実現される。そしてわれわれ自身「美的人間」としての人格の完成が達成せられ、そこに必然的に道義も高揚されて來るのである。

わたくしはこれまで西洋文化の優位性をあまりにも強調しすぎたような、きらいがあるが、それはルネッサンスを経験している西洋文化の先進性を指摘したまでであって、東洋文化あるいは日本文化の優秀性やその存在の根拠を否定しようとするものではない。ヨーロッパのいろいろな國を旅行し、種々の民族とその藝術文化とを觀察して感じたことは、民族性と自然との深い関係であって、日本の文化にもまた、その

よって來った根拠のあることを痛感させられたのである。人間がその周囲の自然の影響を受け、それとの相対的關係において成育し、文化を創造することは、あたかも山川のたえずまいや、そこに生える草木、その中に住む動物と何ら異なるところがない。色の白い人は確かに美しいに違いないが、しかし膚の白い人が強い太陽の光線に照りつけられて眞赤になつてゐるのは、美しいというよりか、かえって痛々しいものである。熱帯地においては、生白い弱々しい膚よりも太陽の光線をはね返すような浅黒い膚の方が、どれほど健全であり、自然であり、美しいかわからない。

一般によく美学者は「周囲の自然と離れた美の純粹形式」の存在を主張するが、果してそのような美の純粹形式が存在するであろうか。ギリシアの神殿は完全な比例感をもつて構成されており、美の典型とも言われているが、それがそのままの形で、氣候の全く正反對なドイツやスコットランドの北歐に持って行かれ、低く垂れこめた曇つた空の下に建てられた場合を想像してみる時、果してそれが美しいと言えるであろうか。裸体像についても同様のことが言えると思う。白い大理石の裸像も、南歐の生暖かい空氣にさらされながら、水辺の緑の草の中にもおかれていれば、別段それは不思議で

はない。しかしこの大理石の裸像が寒風の吹きさらす北歐の廣場に立ち並び、降りつむ雪に膚がうすもれてゐる光景は実に不自然なものである。太陽の赤々と照り輝く南歐の藝術的理想は、そのまま寒い北歐には通用しないことを知らなければならぬ。

また音楽についても、バッハ、ベートーヴェン、ブラームスのいわゆる三つの大きいBの字によって代表されるドイツ音楽は、確かに音楽形式の完成したところであって、その建築的壯麗さには全く驚嘆させられるが、この高度に発達した音楽理論から離れて、人間の情緒からおのずとわき出て感慨を催す音楽の原始的要求において、南歐にあっては時にはむしろ、名もない漁夫が美声を張り上げて歌う一曲のナポリの民謡やヴェネツィアの舟歌に、何か心の琴線に触れられたような、心を動かされるものを感じるのである。ここで考えさせられることは、現代の機械文明の進歩は確かに文化の世界性を高めはしたけれども、しかし生活に基盤をもつわれわれの文化形式は、自然並びにそれにつちかわれた民族性あるいは郷土性と離れて存在するものではないということである。

かくて私は、郷土の特色を表わした郷土の藝術文化を尊重し、保護すべきことの必要を痛感すると同時に、また今後、

外國の藝術文化を採り入れて行く場合、外國の文化だからとて、ただ無批判にそれを採り入れてはいけないということを特に強調しておきたい。われわれの祖先の持つた藝術文化は、そのほとんどすべてが大陸からの移植文化だと言われているが、しかしそれは、ほとんど常にわが國の國土や風尚に適合したものに變形して受け入れられ、やがてはわれわれのものとして消化し、傳えられて來たのであって、そのことは過去の歴史が教えてくれるところである。今や敗戦によって自信を失った日本人の多くは、その個性や郷土性の自覚をも忘れて、ただいたずらに新奇なものを無批判に取り入れているところがある。旧來の誤つた意味の民族性や國民性に執着することは絶対に避けねばならないが、世界の一員としての新しい文化國家を建設しようとしているわれわれは、今こそ、眞の意味の個性の自覚に徹して、「自然と人間との新しい発見」に努め、そこに花々しい新文化を創造しなければならぬ。日本ルネッサンスは、まさにこれから、われわれみずからの努力によって始められねばならない。

(文部省社會教育局藝術課文部事務官)

編集後記

○4月号は暖冬春寒交錯する3月初めに編集を完了した。前号3月号は中央区銀座の発行所から立川市の印刷所工場へ、現金輸送と同時に、本誌の原稿を回送の途中、省線電車内で盗難の災害を受けた。そのため筆者には再度の執筆を煩わし、読者には発行遅延の不義理を重ねた。まことに申し訳ない次第と、ひどく恐縮し、この後記で、おわびのごあいさつを申しあげる。

○新学制最後の段階にある新制大学は、昨年発足した12校の外、その余の大部分の大学のうち、4月の新学年を間近にひかえて、大学設置委員会が適格と認めたのは、公立学校14校、私立65校、あわせて79校で、国立69校の審査は3月一杯に行うことになっているが、この審査が設置委員会の基準に照らしてなされたことは、もちろんであろう。しかし、われわれは既に新制中学校や新制高等学校が、旧日本の中学校や高等学校とは、名称こそ同一であっても、その実質内容においては、全然別個の存在であることは、万人と共に等しく認むるところであるが、同時に新制大学についても、4年制大学という点にいくらか錯覚の虞はあろうが、それは旧日本にはかつて見られなかった存在に外ならぬことを認めない訳にはいかないであろう。本号平野事務官の『新制大学における正課体育について』その経過・内容・問題を読了すれば、それが新制大学特有の性格の必然的屬性であることが了解せられるであろう。

○日本の現態勢は國の内外に向かって、政治的には独立國を、外交的には永久平和の中立國を、経済的には9原則自営自肅の自立國を、思想的には勞資國民連帯を、精神的

には基本的人權と個性尊重を、そして最後に藝術的には郷土と人間の関連における世界独特な文化國家の創造を要望されているのである。この要望に應ずるには、現代人各自の相互教育及び自己教育と、次代の人人の教育成果の上に期待がかけられるであろう。その中で文化國家創造の要望に應ずる教育面を担当すべき読者を目ざして、本号には特に9ページにわたる藤壽意事務官の『藝術と人間と自然』をのせた。

○『ヨーロッパのいろいろな國を旅行し、種種の民族とその藝術文化を觀察して、民族性と自然との深い関係を感じたのであるが、同時に日本文化にも、そのよって來った根柢のあることを痛感させられた』筆者は、『われわれの生活の独自の解決の機関として、又われわれの自覺的な人間性の欲求として、藝術が生れ、藝術を愛し尊重する氣運を醸成することが必要で、このようにして、われわれの生活の中に藝術が溶け込み、われわれの美的情操が陶鑄されて、生活の美化が実現される。そしてわれわれ自身の美的人間としての人格が完成せられ、そこに必然的な道義も高揚されて來るのである』という。

○『今日敗戦によって自信を失った日本人の多くは、その個性や郷土の自覺をも忘れて、ただいたずらに新奇なものを無批判に取り入れている観がある。旧來の誤った意味の民族性や國民性に執着することは絶対に避けなければならないが、世界の一員として新しい文化國家を建設しようというわれわれは、今こそ眞の意味の個性の自覺に徹して、「自然と人間との新しい発見」に努め、そこに花々しい新文化を創造しなければならない。』と本文は結ばれた。編者は読者と共に筆者の深意をくみ取りたい。

文部時報

4月号(第859号)
定價 25円

1箇年 300円(送費24円)
※購読希望の方は直接発行所へ前金申込み下さい。店頭賣はいたしません。

昭和10年10月3日第三種郵便物認可(毎月一回10日發行)
昭和24年4月7日印刷・昭和24年4月10日發行

編集者 文部省調査局
発行所 東京都中央区銀座西7の1 大谷保

印刷者 東京都立川市曙町3の55 行政学会印刷所
代表者 藤木外次

発行所 東京都中央区銀座西7の1 帝國地方行政学会
会員番号 A 120015 電話銀座660-663 振替口座東京13番